

地域の公民館の役割から「住みたいまち」を考える —附属学校園 未来創造科 第7学年カリキュラム改善—

佐藤 響*・大山 朋江*・大谷 由香*・森下 博之*・深見 俊崇**・猫田 英伸**・川路 澄人**

Hibiki SATO・Tomoe OYAMA・Yuka OTANI・Hiroyuki MORISHITA・
Toshitaka FUKAMI・Hidenobu NEKODA・Sumito KAWAJI

Cooperating with Local Community Centers to Help 7th Graders Better Consider 'Ideal Places to Live in':
Curriculum Improvement in the Compulsory School Attached to Faculty of Education, Shimane University

ABSTRACT

2019年度より、島根大学教育学部附属学校園では、幼稚園と義務教育学校の11年間を通じた探究学習のカリキュラムを作成し、実践している。義務教育学校において学校設定科目「未来創造科」を設けて指導を行うとともに、幼稚園においては義務教育学校進学後を見据え、探究学習の素地を養う保育を行っている。しかし、2020年度以降はコロナ禍の影響により、カリキュラムの第7学年に当初設定されていた探究活動である、高齢者福祉施設での体験学習を通じた指導が難しくなった。そのため、2021年度、第7学年の教育内容を当該学年で養うべき資質・能力（「現在の状況や課題が生じている背景を捉える力」（知識及び技能）、「地域や社会が直面する課題の解決に向けて問いを立てる力」（思考力、判断力、表現力））を踏まえつつ、学校周辺の複数の公民館と連携して実施する新たな内容へと変更した。1年間を通して実践を記録し、生徒の変化について継続的に見取りを行った結果、一部の生徒たちにとっては若干の難しさはあったようであるが、全体として見ると公民館が多様な地域の課題やニーズに応じた活動を行っていることに気づくとともに、自らが漠然と抱く「住みたいまち」という概念の背景には多様な人が暮らす社会があることに意識を向けさせることができていた。

【キーワード：未来創造科，探究的な学習，地域連携，カリキュラム改善】

1. はじめに

島根大学教育学部附属学校園では、2019年度より、幼稚園（2年間）、義務教育学校前期課程（6年間）、後期課程（3年間）の計11年間を通じ、園児・児童・生徒の探究的な学びを深めるため、義務教育学校において学校設定科目「未来創造科」を設け、教育活動を行っている。具体的には、幼稚園では日々の保育の中において、前期課程低学年では生活科、前期課程中学年から後期課程修了までは総合的な学習の時間において、発達段階に応じた一貫カリキュラムに基づいて指導を行っている。

未来創造科では、「自分と地域、職業、世界との関わり」についての体験的な学習を通して、自分が本当に「住みたいまち」とはどのような場所なのかについて考えさせることを目指している（表1）。本稿で取り上げる第7学年は、カリキュラムの最終段階である第五期（後述）の入り口に相当し、生徒たちには「他とともに社会に参画する」（第9学年）というゴールに向けて、社会に生きる一個人として実際に社会と関わる経験を通して「社会を知る」ことが期待されている。コロナ禍以前の2019年度においては、生徒たちは高齢者福祉施設への訪問・介護体験を通じた探究学習を行っていた。しかし、2020年度はコロナ禍の影響により高齢者福祉施設への訪問が難しく、オンラインでの調べ学習を中心とした

活動等で内容を急遽代替せざるを得ない状況となった。本学園研究部ではこれを契機として、2021年度の第7学年の探究活動について、長引くコロナ禍の中でも継続実施可能な、そしてカリキュラム上の位置付けに鑑みて同等以上の教育効果を上げることができると教育内容を新たに開発することを目指すこととした。

2020年度末から本学園研究部において検討を重ねた結果、2021年度より第7学年の未来創造科では「地域の公民館の役割から『住みたいまち』を考える」という探究活動を設定し、実践することとなった。本稿は、後述する未来創造科の11年間のカリキュラム（教育内容配列表、資質能力表、学習過程のモデル）との整合性を保ちつつ、第7学年の教育内容の更新を試みたその過程と成果を詳しく報告することを目的とする。近年、総合的な学習（探究）の時間に限らず、すべての教科・領域の指導において探究的な学習活動が注目を集める中、学校を挙げた年間レベルでのカリキュラム改善の取組と、その取組によって生み出された具体の指導案や生徒の産出物の実例等を示すことは、学校教育現場の教員のみならず、教員養成に携わる教員に対しても極めて貴重な情報提供になると考える。なお、本カリキュラム改善の取組は、「第21回（2021年度）ちゅうでん教育振興助成」に採択された教育実践であることを申し添える。

* 島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程

** 島根大学学術研究院教育学系

2022年10月25日受付

2023年2月22日受理

表1 2021年度の未来創造科の教育内容一覧

期	学年	時数	○探究課題 ・主な内容
第五期	9	70	○他とともに社会に参画する ・地域の課題解決につながる社会参画の方法について考え、実践する体験活動
	8	63	○社会に関わる ・職場訪問によるインタビュー活動 (地域で働く人々が考える地域の強みと課題を知る。)
	7	50	○社会を知る ・公民館による探究活動 (生徒たちに複数の異なる地域の公民館の活動を分析・考察させることで「地域の公共性」という概念をつかみ取らせる。)
第四期	6	70	○「島根の魅力」再発見 ・これまでの学習を生かして自ら課題を見つけ、調査する活動 ・身近な社会の現状からSDGsに関する課題を見つけ、解決したことを自分の生活にいかす活動
	5	70	○松江の魅力再発見 ・多様な視点から身近な社会の現状を知り、課題を見つけ、解決する活動
	4	70	○身の回り(松江市)の福祉 ・福祉の視点から学校や地域にある各施設の現状を調査したり、働く人々の思いなど聞いたりしたことをもとにみんなの幸せのために大切なことを見つける活動
第三期	3	70	○松江のものしりはかせになる ・松江市の名所や施設を見学し、松江の魅力を探る活動
	2	105	○つながる私たちの暮らし ・自らの成長を感じながら、1年生の学習から「ひと・もの・こと」とさらに広く出会い、知り、それらとのつながりを見つける活動
	1	102	○広がる私たちの暮らし ・学校生活との出会いを通し、身の回りの「ひと・もの・こと」に触れ、子どもが暮らしを広げる体験を通じた活動
第二期	幼2年		○集団生活をとおして、自己発揮する ・自分の興味関心を持った「ひと・もの・こと」に対し、友達と協同(共同)して調べたり、追究したりして遊びこむ(遊びに取り組む)
	幼1年		○家庭から、初めての集団へ ・園生活の中で自分の居場所を作りながら、さまざまな「ひと・もの・こと」と出会い、安心して見つけた遊びに取り組む

2. 第7学年のカリキュラム上の位置づけ

未来創造科のカリキュラムは、各学年の教育内容をまとめた「教育内容一覧」(表1)と、各期で育成すべき資質・能力をまとめた「資質・能力表」とで構成されている(森下ほか, 2022)。本学園の資質・能力表は学習指導要領に規定されている三つの資質・能力それぞれについて、本学園の学校目標の基盤である「自己理解」「他者意識」「社会参画」の三つの側面から詳述する形になっている。この資質・能力表では、第7学年、すなわち第四期末頃までに生徒に身に付けさせたい能力は以下のように定めている。

【知識及び技能】

自己理解：課題の解決に向けた行動を行うために必要な情報を整理・分析する。

他者意識：コミュニケーションを行うなかで、考えを深め、課題の背景や課題の解決に迫り、解決に向かうことができる。

社会参画：実社会や実生活の中から問いを見だし、課題を理解するとともに、解決に向けた見通しをもつ。

【思考力、判断力、表現力等】

自己理解：考える方法を活用し、自分の考えを確かめたり、深めたり、修正したりする。

他者意識：調べたこと、考えたことなどを伝える相手を想定し、効果的な表現の方法を選び、相手に伝わるように表現する。

社会参画：実生活、実社会の営みやそれを支える人々の考えや思いを受け止め、よりよい考えを生み出している。

【学びに向かう力、人間性等】

自己理解：自分のよさ、得意なことを発揮して探究的な活動に主体的に取り組もうとしている。

他者意識：多面的に考えたり、多様性を受け入れたりしながら協働的に学び、よりよい社会の在り方について考える。

社会参画：・身近な人々や地域に関わり、集団や社会の一員として積極的に行動しようとする。
・学んだことを振り返り、よりよい社会の在り方を求め、新たな問いや課題を見いだす。

資質・能力の詳細を確認すると、これまでに扱ってきた高齢者福祉という題材がカリキュラムの趣旨に沿ったものであったことが分かる。つまり、生徒たちは山陰地域の高齢社会の実態やその背景にある問題について調べ学習を行ったり、実際に高齢者福祉施設を訪問したりして深く知るとともに、表面的な事実からは見えないような当事者たち(高齢者たちや高齢者福祉分野で働く人たち)の生き方や思いに触れることになる。そして生徒たち自身に、「そのような社会」の一員として、今または将来どのようにかわり、生きていくのかについて考えさせることが目指されていた。

表1にあるように第7学年の中核的な目標は「社会を知る」ことである。そのため、「少子高齢社会」という言葉のように、生徒たちが「言葉のみを聞いて知ったつもりになっている社会的な取組・組織」を題材として扱うことが適切であると考えた。このことから、高齢者福祉施設に代わる探究学習の題材として公民館という題材が候補として浮上した。

また、本学園では上記のような各期で育成を目指す資質・能力を、探究学習の過程において表出する児童生徒の具体的な行動に落とし込んだルーブリックを作成して

いる。第四期の生徒についての記述は以下のようになっている。なお、探究学習の過程の区分（課題設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現、振り返り・価値づけ）は基本的には平成29年版、平成30年版学習指導要領に則っているが、一部本学園の教育方針を反映させ、「振り返り・価値づけ」という過程を加えている。詳細は森下ほか（2022）を参照されたい。

【五つの局面ごとに期待する子どもの姿】

○課題設定：

- ・自分の暮らしや身近な社会で起きる事象についてイメージをもち、視野を広げて考えたり、自分事として考えたりしながら課題を設定できる。
- ・解決の可能性・実現性を吟味して、課題を設定できる。

○情報の収集：

- ・必要な情報に合った収集方法を考え、資料、書籍、インタビュー、インターネットなどの方法から適切な方法を選んで情報収集できる。
- ・ICT機器を用いて、アンケート等を作成し、より多くの情報や意見を効率的に集めることができる。

○整理・分析：

- ・集めた情報の中から、自分の設定した課題の解決に結びつくものを選ぶことができる。
- ・思考ツールを用いて整理・分析し、解決しようとしている課題についての理解を実感につなげることができる。
- ・自分が集めてきた情報と、他者の情報とを比較して分析・検証することができる。

○まとめ・表現：

- ・集めた情報の中から、伝える相手に応じた効果的な表現方法を選択し、まとめることができる。

○振り返り・価値づけ：

- ・自分の設定した課題の解決につながる活動になったか、よりよい方法はないか、自分たちの取り組みについて検証することができる。
- ・取り組んだ活動の価値を確かめ、課題を修正したり、新たな課題を発見して追究したりしようとする。

公民館を題材として「自分たちの住みたいまち」を考えるというカリキュラムを構築していくうえで、これらの五つの局面ごとの子どもの姿を見取ることができる活動を随所に入れ込むように工夫をした。詳細は後述するが、その際には子どもたちの学習過程が作業的な一方向の流れになってしまうのではなく、試行錯誤のスパイラルの中で思考が深まっていくように活動の流れを組み立てている。

なお、そのような通時的な学習スパイラルとともに、教科学習との共時的な往還についてもこのたびのカリキュ

ラム改善では意識している。例えば、公民館を訪問して職員や利用者インタビューを行う時期の前に国語科においてインタビューの方法を指導している。以下の図1は国語科と未来創造科の学習内容を関連づけた活動のワークシートである。この生徒の振り返りからは、抽象的な答えに対して追加で質問することの大切さや（深く尋ねること）、自由質問（広く尋ねること）の価値に気付いている様子が見受けられる。

図1 未来創造科と国語科の学習内容を関連付けたワークシート

この他にも、調べ学習や公民館でのインタビュー後の情報の整理・分析の活動に入る前には、理科において「観察から共通性と多様性見だして分類する」学習を行ったり、壁新聞づくりの活動の前には美術科においてレタリングの指導を行ったり、最終発表会の前には国語科や英語科（英語プレゼンテーションコンテスト）で聴衆を「まきこむ」話し方の工夫について指導を行ったりするカリキュラムとなっている（図2）。

このような綿密なカリキュラムの中の1学年分の教育内容を新しいものに更新するという取組は困難を極めるとも思われるかもしれない。しかし実際には、未来創造科の第7学年の学習の位置づけが明確になっており、どのような力をどのような学習過程を通して身につけさせるのかというイメージがあればこそ、短期間でカリキュラム更新をスムーズに行うことができた。本学園における継続的なカリキュラムマネジメントが実用面において効果を上げたと言える。次節以降では、上述のような背景の中で行われた教育実践を可能な限り詳細に報告する。

図2 国語科の「まきこみ」発表ワークシート
表面(左)、裏面(右)

3. 新たな探究活動「地域の公民館の役割から『住みたいまち』を考える」の概要

(1) 対象者

第7学年(4クラス) 118名

(2) 科目

未来創造科(総合的な学習の時間)

(3) 生徒の実態とねらい

本校の生徒の約半数は第7学年からの編入生である。本校の生徒の特徴として、生徒の居住範囲が非常に広範囲(東は鳥取県米子市、西は出雲市に及ぶ)にわたり、公共交通機関を利用しての遠距離通学者も少なくない。そのため、限定された校区から進学してくる地域の公立学校と比べると、地域背景も多様であり、地域への帰属意識も弱いと考えられる。初回の未来創造科のガイダンスにおいて、生徒に対して以下の二つの質問を行った。

問1. 「公民館は何をすることだと思うか」

問2. 「将来(就職したり、家庭をもったりするころ)、島根、鳥取に住みたいか」

一つ目の質問に対して、多くの生徒は公民館を、地域ごとに設けられた「貸スペース」のようなイメージでしか捉えておらず、実際に公民館がどのような活動を行っているのか、また地域社会の中でどのような役割を担っているのかについてほとんど知識がないように見受けられた。このことから、生徒たちに実際に公民館を訪問させ、さまざまな物(設備や掲示物等)を見たり、ひと(職員や利用者等)と関わったりする中で、公民館という生涯教育施設が備える「公共性(新しい公共)」という概念について探究させるという指導の妥当性は確認された。

また、二つ目の質問に対しては、「住みたい」と答えた生徒が46%であった。住みたい理由として、ひと・もの・ことの視点から島根・鳥取のよさを捉えることができている生徒もいた。その反面、住みたくない理由とし

て、「遊ぶ所が少ない」「交通が不便」「都会への憧れ」など、中学生目線で島根、鳥取の現状を捉えた回答がみられた(多くを占める回答を図3に示す)。

【住みたい理由】

- ・人が優しい。 ・犯罪が少なく、災害も少ない。
- ・自然が豊かで、島根にいたるとても安心できる
- ・自分が大人になったときに、地域と一緒に生きていきたい。
- ・オンライン会議で仕事ができるから、都会にいなくてもやりたいことができる。

【住みたくない理由】

- ・都会に住んでみたい。 ・流行についていけない。
- ・店が少なく、交通が不便だから。
- ・都会に出て、もっといろいろな世界を見たい。
- ・他の県に住んでみないと、島根の良さはわからない。
- ・一度は県外に出て、老後は島根に住みたい。
- ・自分のやりたい仕事が都会にしかない。

図3 「将来、島根、鳥取に住みたい・住みたくない」理由

後期課程での3年間を通じた活動の中で、島根、鳥取を「住みたいまち」にしていくために、第7学年では生徒自身が課題の視点を自分の視点だけでなく、複数の視点から考えることができるようにさせたい。例えば、高齢者や子育て世代など自分とは立場の違う人の視点を取り入れることで、自分だけが住みたいまちをつくるのではなく、さまざまな人が住みたくするための視点をもって学習に取り組めるようにしていく必要があると考える。また、今のまちを自分がどう感じているのかという視点で振り返り、魅力をより伸ばしたり、課題解決の方策を考えたりすることができるようにさせたいと考えた。以上の学習を通して、第7学年の未来創造科において育成を目指している「現在の状況や課題が生じている背景を捉える力」、「地域や社会が直面する課題の解決に向けて問いを立てる力」の伸長を図る。

この取り組みを実施するにあたっては、松江市内の六つの公民館(川津公民館、雑賀公民館、城西公民館、城北公民館、白濁公民館)に協力をいただいた。各クラスにおいて、生徒たちはそれぞれ六つの公民館の一つを「担当公民館」として割り当てられ、適宜、(クラスをまたいだ)担当公民館グループで活動しながら学習に取り組む形とした。第7学年の未来創造科50時間中の本活動に関わる部分(40時間分)の指導の詳細をまとめたものが以下の表2である。なお、学習過程の欄の「時」ごとに記した「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」「振り返り・価値づけ」は、年間を通じた「大きな探究サイクル」における位置づけを示しており、微視的に見た場合には、各次(あるいは各時)の中で「小さな探究サイクル」が繰り返されていることには留意されたい。

表2 指導の流れ

次	回	過学習時	学習活動	形態
第一次	1	1	○課題設定 ○未来創造科ガイダンス ・後期課程3年間や第7学年での活動のねらいや学習の進め方について知る。	学年
	2	1	○「住みたいまち」について考える① ・自分や自分とは違う立場の人の「住みたいまち」について、思考ツールを使ってイメージを広げ、自分と友達の意見を比較しながら伝え合う。	学級
	3	1	○情報収集 ・講演会① ・公民館の施設や地域における役割について知る。	学年
第二次	4	1	○課題設定 ○公民館オリエンテーション ・公民館のイメージマップをかく。 ・自分の担当する公民館や、メンバーを知る。 ・夏休みの宿題(身近な人へのインタビュー・自分の地区の公民館調べ)について知る。	グループ
		夏休み	○情報収集 ○身近な人へのインタビュー ○自分の地区の公民館調べ	個人
	5	1	○課題設定 ○「住みたいまち」について考える② ・自分の地区の公民館調べを発表し、観点をグループピングする活動を行い、調査する観点を広げる。 ・探究の課題を共有し、公民館への問いを生み出す。	学級
	6 7 8	3	○情報収集 ○調査活動準備 ・公民館への問いからインタビューしたいことを共有する。 ・担当公民館について調べ学習を行う。	グループ
	9 ～ 18	10	○情報収集 ○公民館訪問 ・公民館へ訪問し、館長さんの話を聞いた。施設を見学したりする。 ・公民館で行われるサークル活動を見学する。 ・インターネット等を使い、公民館について調べる。	グループ
第四次	19 20	2	○整理・分析 ・公民館訪問で学んだことを振り返り、公民館へ礼状を書く。 ・公民館訪問を通して考えた「住みたいまち」についての自分の考えをまとめる。	グループ
	21 22	2	○整理・分析 ・分析・報告準備 ・公民館訪問を通して情報収集してきたことを整理する。 ・公民館ではどのような「住みたいまち」を目指して取組が行われていたのか整理する。	グループ
	23	1	○整理・分析 ○住みたいまちについて考える③ ・複数の公民館の取組を比較する活動を通して、「住みたいまち」について説明する。	学級
	24 25	2	○情報収集 ○講演会②③ ・地元の島根や松江に根ざして活動しておられる方から話を聞き、住みたいまちに対する視点を広げる。	学年
第五次	26 ～ 33	8	○まとめ・表現 ○発表会に向けた準備 ・公民館訪問を通して集めた情報を、「住みたいまち」の視点を踏まえながら、新聞にまとめる。 ・発表会に向けて、作成した新聞等を使ってプレゼンテーションの準備をする。 ・発表会のリハーサルを行い、発表の改善を行う。	グループ

34 35	2	まとめ・表現	○7年生発表会 ・公民館での情報収集を通して、自分の考えた住みたいまちについて発表する。 ・友達の発表を聞いて、「住みたいまち」について考える。	学年6年生
36 37	2	情報収集	○8年生発表会 ・8年生の発表会に参加し、今後の活動の見直しをもつ。	学年8年生
38	1	情報収集	○9年生発表会 ・9年生の発表会に参加し、今後の活動の見直しをもつ。	全校
39	1	整理・分析	○住みたいまちについて考える④ ・公民館での情報収集を通して、現状や課題を共有する。 ・公民館のイメージマップを作成し、活動前のイメージマップと比較する。 ・「住みたいまち」にしていくために、まちや人のために今の自分たちにできることは何かを考える。	学級
40	1	振り返り・価値づけ	○ふりかえり ・「社会を知る」をテーマに活動してきたことを振り返る。 ・来年度以降の活動の見直しをもつ。	学級

4. 活動の実際

(1) 第一次(5月～7月)：主として課題設定

ガイダンスを行うとともに、現段階での自分が持っている「住みたいまち」のイメージを言語化することを通して、年齢やさまざまな状況に置かれた人々にはそれぞれの「住みたいまち」(住みやすいまち)があることに気づかせた(Appendix A指導案「住みたいまちについて考える①」)。その際、マッピングの手法を用いて生徒たちに思いついたものを自由に書き出させておき、後日(第五次)、生徒自身が活動全体を振り返るきっかけとなるようにした。その後、生徒を六つのグループに分け、各グループに担当公民館を割り当てて活動を開始した。

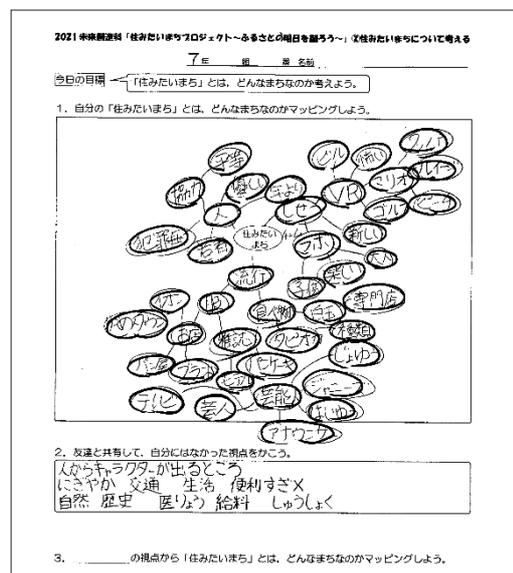


図4 「住みたいまち」のマッピング

図4はこの時点での生徒たちのマッピングの典型例である。大きな特徴が二つある。一つ目はあくまで自分が個人として山陰地域にあって欲しいもの、いてほしい人を挙げていることである(ブランド品の店、VR施設・テーマパーク、芸能人など)。そしてもう一つは、漠然としたユートピア的な社会のイメージである(犯罪が無い、人が優しい、自然が多いなど)。これらの記述からは、生徒たちが「住みたいまち」という概念を独り善がりに捉えていたり、また逆に自分とは関係のない抽象的なものとして半ば無関心になっていたりする様子が垣間見える。第7学年の未来創造科では、ここで抜け落ちてしまっている「自分を含む多くの人が社会を形成して、今、住んでいること」に目を向けさせ、自分はそのような社会の中で生きていきたいのかについて考えさせることを目指している。

(2) 第二次(8月)：主として情報収集と課題設定

まず、公民館のイメージマップを描かせた。その後、そもそも公民館とは何か、自分の担当公民館で行われている取り組みについてインターネット等を用いて調べるなど、第三次での公民館訪問を想定した学習課題の設定を行った。夏休み中には「自分の住む地域の公民館調べ」と合わせて「身近な人への『住みたいまち』インタビュー」を各自で行わせた(上掲図1)。それらから得た情報をグループ内で互いに報告し合うことで、今後の公民館訪問や調べ学習における観点を増やし、多面的に考えることができるようにした。そして、「公民館の取組から『住みたいまち』のヒントを探ろう」という学習課題を設定して思考を深めさせるとともに、第三次で担当公民館を訪ねる際に、質問したいことを整理させた。



図5 公民館調べワークシート(左)と 公民館への質問作りワークシート(右)

上の図5がこの学習段階での生徒たちのワークシートの典型例である。調べ学習を通して、公民館が単なる貸しスペースではなく、目的をもって活動している組織であることを理解し始めている。そのうえで、公民館の活動の目的は何であるか、またその利用者はどのような人たちなのかについて知りたいと感じ始めている状態である。図5からは「どの世代がどんな目的でよく利用」しているのか、そして公民館ごとに利用者に合わせて活動

の違いがあるのかといった、一歩進んだ問が生まれていることが分かる。

(3) 第三次(9月~10月)：主として情報収集

情報収集のため、グループごとに実際に公民館を訪問させた。生徒たちは、①公民館長、職員、利用者の方などにインタビューをしたり、②利用者の方と一緒に活動に参加したり、③公民館の中や周辺をフィールドワークで調査したりする中で、第二次で考えた公民館の取組と「住みたいまち」の関係についての情報を収集した(図6、図7)。



図6 館長や利用者インタビューの様子

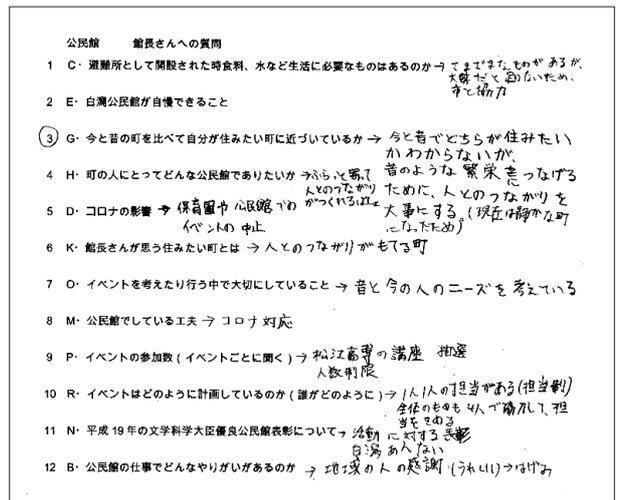


図7 公民館長へのインタビューメモ(抜粋)

図7を見ると、時代の移り変わりの中で地域の様子や地域の人のニーズが変わり、それに合わせて公民館も変わろうと積極的に活動している実態を聞き取ってメモできていることが分かる。また、公民館長が考える住みたいまちについて尋ねたり、「今と昔の街を比べて自分が住みたいまちに近づいているか」という踏み込んだ質問をしたりすることで「昔のような反映につなげるために、人とのつながりを大事にする町にしたい」という非常にリアルな回答を引き出している。生徒たちが自分たちの目線で公民館の存在について自ら考え、自分たちが知りたいと思った質問を作ることができていたからこそ、生徒たちだけでこのように充実したインタビューができたと思われる。

(4) 第四次(11月)：主として整理・分析

自分の担当公民館について、他の公民館の担当であった生徒たちに正確に過不足なく情報を伝えるために情報

の整理を行わせた。作業に際しては公民館訪問や調べ学習で収集した情報の整理・分析を付箋やクラウド端末を使って行った(図8)。



図8 情報を整理・分析の様子

情報の整理・分析の際には次のような留意点を提示することで、第四次のまとめの際に参考になるようにした。

留意点1

収集した多くの情報を多様な視点から分析する
→構造化する、可視化する

留意点2

具体的な方法で提示する
→順序立てる、つなげる、関連付ける、比較する、具体化する

六つの公民館について全体で情報共有を行い、共通点と相違点を見つけ、その理由を考えてまとめさせた。その後、公民館と「住みたいまち」の関係について再び考えさせ、考えを深めさせた(Appendix C指導案「住みたいまちについて考える③」)。

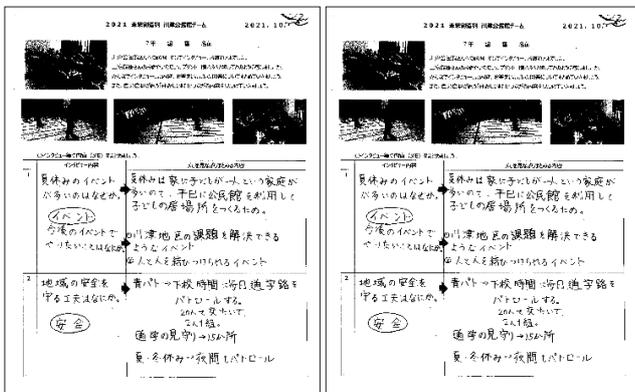


図9 公民館の情報をまとめたもの

生徒たちはそれぞれの担当の公民館についてまとめた図9のようなワークシートを用いて他の生徒と情報共有を行った。生徒たちは六つの公民館の情報を集めることで各公民館が立地する地域の特徴や(住宅地か商業地か、近隣施設など)、住民の年齢層、力を入れている取組などを俯瞰して共通点、相違点を考えることができていた。この時点では、生徒たちは公民館を「無機的な場所」としてではなく、さまざまな人が思いを持って活動している「有機的な組織」という側面から捉えられている様子であった。

(5) 第五次(12月):主としてまとめ・表現

発表会に向けてのまとめ活動を行った。自分たちの担当公民館の取組、その背景にある目的や人の思い、生み出されている成果、また公民館の間の差異や共通点などについて個人で新聞を作成させるとともに、プレゼンテーション資料にまとめさせた。発表会では前期課程第6学年や各公民館の担当者、保護者に向けてプレゼンテーションをプロジェクターで映しながら行った(図10、図11)。



図10 生徒が作成した新聞



図11 発表会の様子

複数の異なる地域の公民館の活動を分析・考察させる活動を通して、自分たちの身の回りの大人や組織が常に「誰か」のために活動していること、またそれによって社会が維持されているということを経験した。また、最終活動の一部として再度公民館のイメージマップを描かせ、各生徒に自分が第二次冒頭で描いたものと比較させ、第7学年での活動を振り返らせた。これにより、「住みたいまち」という概念が社会と不可分であり、自分も社会の一員であることに意識を向けさせるとともに、8年生の未来創造科で行う「職場訪問によるインタビュー活動(地域で働く人々が考える地域の強みと課題を知る)」への見通しを持たせた(Appendix D指導案「住みたいまちについて考える④」)

5. 成果と課題

以下では、生徒たちの活動前と活動後の「住みたいまち」のマッピングを比較した際に見られた代表的な変化について事例とともに解説する。まず、図12は図4と同じ生徒の活動後の「住みたいまち」のマッピングである。

2021 未来創造科「住みたいまちプロジェクト～あるさとの明日を創ろう～」④住みたいまちについて考える4

7年 組 番号

目標 学んだことを振り返り、よりよい社会の在り方を求め、
 根拠の強みや課題を考えよう。

1. 「住みたいまち」にしていくために、公民館の取組で見つけた良い点や課題を整理しよう。

【良い点】	【課題】
<ul style="list-style-type: none"> 高齢者の歩行防止(オレンジマーカー) 防災対策(避難物資)をくれた対応 安心安全なまち サマーフェスティバル(つなご) ワイヤレス充電も良く安心安全なまち 地域の良さを生かす コロナ対策(オンライン) フリーWi-Fi イベント 	<ul style="list-style-type: none"> Wi-Fiが足りない 新しい設備(資金) 高齢者の通入(人口減少) 地域とのつながりがない 若い人の参加が少ない 活動量(イベントなど) 地域のつながりが減った 災害時の対応

2. 現時点の自分の「住みたいまち」とは、どんなまちなのかマッピングしよう。

図12 図4の生徒の活動後の「住みたいまち」のマッピング

この生徒(生徒A)の活動前のマッピングには自分目線の住みたいまちに関する言葉のみが書かれていたが、活動後は「安心・安全」の裏側には住民の日々の「取組(パトロール)」や「防災訓練」が存在していることや、一足飛びに「多額の資金」が必要となる「施設」の誘致を求めるのではなく、「歴史や文化」といった「地域の良さを生かす」ことで「人口」、特に「若者」を「イベント」でつなげ、増やすことの可能性に意識が向いている。

図13は別の生徒Bの活動前と活動後の「住みたいまち」のマッピングの部分のみを抜粋したものである。活動前のマッピングを見ると、生徒Bは生徒Aよりも比較的のどかな町に住みたいと考えていることが分かる。内容としては、「自然が豊か」や「地域の人優しい」といった漠然としたイメージのみを書き出している。それに対して、活動後では「自然の維持、管理」や、普段から「世代を超えた交流」を行うことによる「いざという時に協力できる」地域づくり、そしてそれらの地域の人々の生活を支える・ニーズに応えるための「インフラ整備(教育インフラを含む)」の必要性に言及があり、明らかに思考が深まっていることが見て取れる。

最後に図14の生徒Cに着目してみる。この生徒は活動前の時点からそこに住む人々の生活をイメージできている。別の言い方をすれば、当初から「私が住みたいまち」というよりも、「私たちが住みやすいまち」について考えていたタイプの生徒である。生徒Cの活動後の

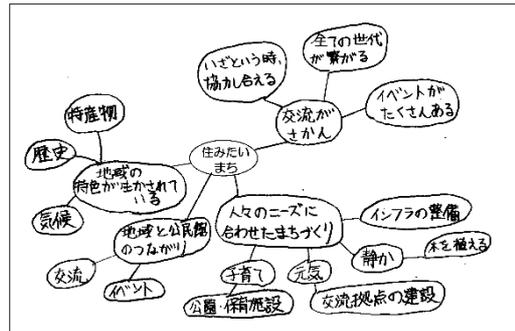
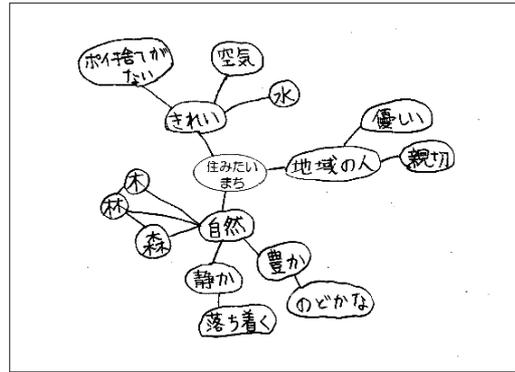


図13 生徒Bの活動前(上)、活動後(下)の「住みたいまち」のマッピング

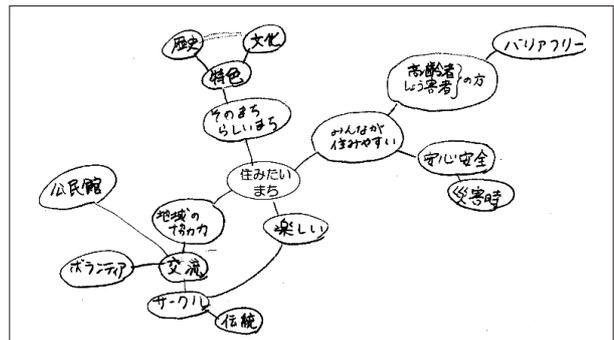
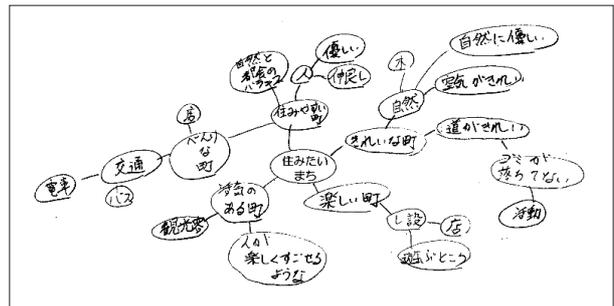


図14 生徒Cの活動前(上)、活動後(下)の「住みたいまち」のマッピング

マッピングを見ると、内容的には大きな変化が見られないように感じられる。しかし、この生徒の中で「私たち」という概念自体が「高齢者や障がいのある方」を含めた、社会を構成する「みんな」という概念に広がっていることの重要性を見落としてはならない。表1を見ると分かるとおり、実はこのような福祉の視点は未来創造科の第三期(第4学年)で社会科の指導と連動して扱っているものである。このような生徒の記述は、未来創造科の長

期的なカリキュラムの中で、生徒がスパイラルに学びを深めることができている証左であると言える。

ここまで3名の生徒の活動前後のマッピングを例として挙げながら、典型的な生徒の視点の変化・思考の深まりを紹介してきた。生徒たちは、公民館を題材とした学習を通して、社会では多くの人々が日々の生活の中で「誰かのために」さまざまな活動を行っており、その思いこそが社会を維持、発展させていくために重要であるということに気付くことができている。またそのことは、生徒たち自身が、自らも社会を支える構成員の一員としての責任を負っていることを自覚することと表裏一体である。この点を踏まえて、続く第8学年の未来創造科の目標は「社会に関わる」、そして第9学年の目標は「他とともに社会に参画する」と発展していく。第7学年での学びが以降の学年での学びにスムーズにつながるためにさらに何が・どのような指導が必要であるかについては今後とも継続的な検討が必要な点である。

最後に、実際に授業を担当した第7学年の教員が感じた課題としては、「住みたいまち」という言葉の定義が時折あいまいになってしまった点が挙げられる。生徒たちが「住みたいまち」について考える場面は1年間を通して幾度となくあったが、その都度「誰にとっての住みたいまちなのか」と、最初の問に戻って悩む生徒の姿が見られた。今後は、教員が折を見ながら意識的に視点を段階付けて広げることで、生徒たちに自分の理想と、現実に見てきたもの・ことを行ったり来たりしながら、住みたいまちとは何かを自分の言葉で説明する部分で悩む姿を引き出すことができるようにしたい。

参考文献

- 国立教育政策研究所（2020a）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 生活科』
- 国立教育政策研究所（2020b）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 総合的な学習の時間』
- 国立教育政策研究所（2020c）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 総合的な学習の時間』
- 森下博之・鶴原渡・鎌田真由美・錦織裕介・濱野富由美・河添達也・御園真史・深見俊崇・香川奈緒美・下村岳人・猫田英伸（印刷中）「島根大学教育学部附属学園における11年間を通じた「未来創造科」のカリキュラム開発」『教育臨床総合研究』第21巻
- 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領解説 生活科編』
- 文部科学省（2017b）『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』
- 文部科学省（2017c）『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』

謝辞

本実践を行うに際しては、松江市内の川津公民館、雑賀公民館、城西公民館、城北公民館、白濁公民館よりご協力をいただきました。また、本校の執筆に際し、島根大学教育学部附属学校園長 常松 浩 先生、附属幼稚園長 太田 泉 先生、附属義務教育学校前期課程副校長 和田律夫 先生、附属義務教育学校後期課程副校長 津田昌彦 先生にはお力添えをいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

【Appendix A 指導案「住みたいまちについて考える①」】(第2時/全40時：第一次)

1. 育成を目指す資質・能力

- ・自分や自分とは違う立場の人の「住みたいまち」について、思考ツールを使ってイメージを広げ、自分と友達の意見を比較しながら伝え合う。

2. 本時の内容

学習活動	教師の支援
<p>1. 前時（未来ガイダンス）を振り返る。（5分） ○前時のワークシートを返却し、隣同士で住みたい or 住みたくない理由を共有する。 →ワークシート返却 ○7年生全体、クラス毎の住みたい or 住みたくない率を確認する。</p> <p>2. 本時の目標を確認し、自分にとっての「住みたいまち」について考える ○自分にとっての「住みたいまち」について、どんなまちなのかマッピングする。（10分）</p> <p>3. マッピングを共有する。（10分） ○自分のマッピングをペアまたは班で共有し、自分になかった視点をワークシートにメモする。</p> <p>4. 自分とは違う視点から「住みたいまち」について考える。（10分） ○子ども、大学生、働く世代、高齢者の4つの立場を班で分担し、「それぞれの住みたいまち」がどんなまちなのかマッピングする。 ①紙で付箋 ②ホワイトボード ③jamboard</p> <p>5. 学級全体で共有する。（10分）</p> <p>6. 振り返りをする。（5分）</p>	<p>・授業までに、前時のワークシート、ふりかえりに目を通し、いくつか紹介する。</p> <p>・7年生の住みたい or 住みたくない率、その理由については、スライドまたは3組前の掲示物などを使う。</p> <p>・マッピングについては国語の時間にレクチャーを受けているため、マッピングのやり方を困っている生徒には国語のファイルを参考にするように指示する。</p> <p>・自分の理想のまちを想像しながらマッピングするように伝える。</p> <p>・時間やクラスの状態に応じて、班、ペア、前後などで共有する。</p> <p>・数名の生徒に学級全体に向けて発表するように促す。</p> <p>・出てきた理由を踏まえながら、「都会なら住みやすいのかな？」「住みやすいとはどんなことかな？」など、都会か田舎かという視点だけにならないようにする。</p> <p>・中学生目線の意見に対しては「子育て世代は？高齢者にとっては？」などと問い返し、次の違う視点からのマッピングにつなげられるようにする。</p> <p>・班で1つのマッピングを作るように伝える。</p> <p>・マッピングするツールは、①紙で付箋②ホワイトボード ③jamboard から班で選んで行うように伝える。</p> <p>・自分の親、祖父母、兄弟、実習の先生などを想像しながら書くように促す。</p> <p>・「自分たち（中学生）と同じかな」と声がけし、大切なもの、大事にしたいものが世代によって違うかもしれないと気付けるようにする。</p> <p>・自分（中学生）、幼稚園児、大学生、働く世代、高齢者など、それぞれの共通点や相違点を見つけるように促す。</p> <p>・数名のふりかえりを紹介し、今後の公民館での活動で、実際にたくさんの人と関わる中でいろいろな人の住みたいまちについてインタビューしたり、調査したりする活動につながるようにする。</p> <div data-bbox="805 1877 1420 2069" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">評価の観点（思考・判断・表現）</p> <p>自分や自分とは違う立場の人の「住みたいまち」について、ウェビングツールを使ってイメージを広げ、自分と友達の意見を比較しながら伝え合うことができる。【授業観察・ワークシート・ふりかえり】</p> </div>

3. 概ね満足と考えられる生徒の姿

自分や自分とは違う立場の人の「住みたいまち」について、ウェビングツールを使ってイメージを広げ、自分と友達の意見を比較しながら伝え合うことができる。

(活動の振り返りの記述)

- ・自分と友達の住みたいまちでも全然違って、同じ中学生なのに趣味や大事にしているもので変わってくるのが分かりました。中学生だけでなく、すべての世代の人が住みたいと思えるまちとはどんなまちなのか知りたいと思いました。
- ・今日はいろいろな立場から住みたいまちについて考えました。自分以外の立場のことを考えるのは難しかったです。本当にあっているのかインタビューしたいと思いました。
- ・住みたいまちについて考えました。やっぱり島根は自分の住みたいまちとは違うと思いました。早く都会にいきたいです。

【Appendix B 指導案「住みたいまちについて考える②」】(第5時/全40時：第二次)

1. 育成を目指す資質・能力

- ・夏休みに地域の公民館を調査した観点を分類する活動を行い、調査する観点を広げる。(知識・技能)
- ・「公民館の取組が『住みたいまち』につながっているのはどんなところだろうか」について、自分の考えをもち、今後探究する上での問いを見いだすことができる。(思考・判断・表現)

2. 本時の内容

学習活動	教師の支援
<p>1. 「住みたいまち」について振り返り、本時の目標を確認する。(5分)</p> <p>○7年生全体、クラス毎の住みたい or 住みたくない率を確認する。</p> <p>○夏休みの課題①「身近な人へインタビュー」を使って、インタビューした人にとっての『住みたいまち』とは、どんなまちなのか(質問①)を伝えあう。</p> <p>○本時の目標①「公民館レポートを共有し、今後の調査活動の観点を知ろう」を伝える。</p> <p>2. 自分の住む地域の公民館(コミセン)について調べたことを班で発表する。(5分)</p> <p>3. 調べた観点を付箋に書き出し、班で分類し、学級全体で共有する。(20分)</p> <p>○調べた観点を付箋に書き出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的、目標、モットー ・サークルの数 ・サークルの種類 ・利用者の数 ・利用者の年齢層 ・掲示物 ・置いてある物 ・スタッフ数 ・スタッフの仕事 ・歴史 ・行事予定 <p>○班で付箋をグルーピングし分類する。</p> <p>○班の分類をいくつか発表する。</p> <p>○他の班の分類を見る。</p>	<p>・1学期の活動を振り返りながら、「住みたいまちプロジェクト」を思い出せるようにする。</p> <p>・「AI テキストマイニング」を使い、子ども、親、祖父母の年代別の「住みたいまち」についての頻出理由を抽出したデータを提示し、視覚的に伝える。</p> <p>・大人たちは、自分のための住みたいまちでなく、みんなのための住みたいまちについて考えていることに触れる。</p> <p>・本時の目標②「公民館の取組が『住みたいまち』につながっているのはどんなところだろうか」について、自分の考えをもち、今後探究する上での問いを見いだそう」については、授業の後半で提示する。</p> <p>・夏休みの課題②でまとめたレポートを見せながら発表するよう指示する。</p> <p>・班ごとにホワイトボードかジャムボードを用いるかを選択できるようにする。</p> <p>・観点の具体例を例示するなどし、書き出しやすくする。</p> <p>・調べ学習では様々な観点から調べる必要性を感じられるように、他の班の発表を聞いたり、見たりする時間を設定する。</p> <p>・観点を共有する活動を行うことで、調べるときの観点を広げ、多角的に考えることができるようにする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">評価の観点(知識・技能)</p> <p>夏休みに地域の公民館を調査した観点を分類する活動を行い、調査する観点を広げる。 【授業観察・付箋・ジャムボード・ワークシート・ふりかえり】</p> </div>

<p>4. 探究のための課題を把握する。(2分)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 公民館の取組から「住みたいまち」のヒントを探ろう </div> <p>5. 公民館の取組が『住みたいまち』につながっているところについて、自分の考えを記述し、共有する。(8分)</p> <p>○課題に対する自分の考えを記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サークルがたくさんあるのは、地域の人が趣味を楽しめる町を目指しておられるからではないかな。 ・高齢者向けの外での活動が多いのは、地域の高齢者の方が健康で過ごせる町を目指しておられるからではないかな。 <p>○課題に対する友達の考えを聞く。</p> <p>6. 公民館に関する問いを見だし記述する。(5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の何%ぐらいの方が利用しておられるのか。 ・利用者はどのような思いで利用しておられるのか。 ・高齢者の利用が多いのはなぜか。 ・公民館が広報を出しておられるのはなぜか。 ・公民館の広報は、どのような目的で出されているのか。 ・公民館のサークルは、誰が決めて実施しておられるのか。 ・災害があったときの公民館の役割は何か。 ・どこの公民館も同じ活動をしているのか。 <p>7. 振り返りをする。(5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで調べてきたことを踏まえ、9年生で行う「住みたいまちプロジェクト」のための情報収集として、公民館を訪問することを確認して、課題につなげる。 ・公民館の取組と「住みたいまち」のつながりについて、現段階の自分の考え(予想)を書くように促す。 ・困っている生徒には、自分や友達が作成した公民館レポートを参考にしながら、公民館で行われている活動から「住みたいまち」につながっている項目を見つけるように伝える。 ・班で考えを発表しあう時間をとる。さらに数人に発表を促し、考えを共有する。 ・課題に探究する上で、更に知りたいことや今疑問に思っていることなどを問いとして書き出していくとよいことを伝える。 ・今回の問いをもとに今後の調査を行うことを伝える。 ・困っている生徒には、「館長さんや利用者の方にどんなことをインタビューしてみたいのか」と声がける。 ・問いの出し方の例として、「なぜ」「どのような」「どのように」「どれくらい」といった言葉や「なぜ、〇〇は□□だろうか」「〇〇は□□なのはどうか」などの形式を示す。 ・課題にする考えや公民館に対して興味関心をもっていることを問いかけたり、具体化したりできるような声がけをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">評価の観点(思考・判断・表現)</p> <p>「公民館の取組が『住みたいまち』につながっているのはどんなところだろうか」について、自分の考えをもち、今後探究する上での問いを見だししている。【授業観察・ワークシート・ふりかえり】</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りは、「今日の授業で分かったこと・もっと調べてみたいと思ったこと」の視点で書くように指示する。
---	--

3. 概ね満足と考えられる生徒の姿

「公民館の取組が『住みたいまち』につながっているのはどんなところだろうか」について、自分の考えをもち、今後探究する上での問いを見だししている。

(活動の振り返りの記述)

- ・今日は、公民館への問いを立てました。夏休みに調べたときは、公民館のHPを見て調べたので、情報は分かったけど、館長さんや利用者の方の思いやなぜその取組があるのかななどは分からなかったもので、実際に訪問してインタビューをしっかりとりたいと思いました。
- ・班で公民館調べを発表して、人によって調べている内容が違っていてもおもしろかったです。また、公民館によっても活動に違いがあるのかなという疑問も生まれました。2学期にみんなでいろいろな公民館について調査をするので、それが終わってからの発表会が楽しみになりました。

【Appendix C 指導案「住みたいまちについて考える③」】(第23時/全40時：第四次)

1. 育成を目指す資質・能力

- ・複数の公民館の取組や特徴を比較する活動を通して考えた「住みたいまち」について、説明することができる。

2. 本時の内容

展開計画

学習活動と予想される子どもの反応	教師の支援（・）と評価
<p>1. 今までの活動を振り返り、本時の目標を確認する。(5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○7年生全体、クラス毎の住みたい or 住みたくない率を確認する。 ○年代別の「住みたいまち」についての頻出理由を抽出したデータを提示する。 ○どの公民館を訪問したかを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・城北公民館 ・川津公民館 ・城東公民館 ・雑賀公民館 ・城西公民館 ・白湯公民館 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの活動を振り返りながら、「住みたいまちプロジェクト」を思い出せるようにする。 ・夏休みのインタビュー調査の結果を年代別の「住みたいまち」についての頻出理由を提示し、視覚的に伝える。
<p>複数の公民館の取組や特徴を比較する活動を通して考えた「住みたいまち」について説明しよう。</p>	
<p>2. 自分が訪問した公民館の取組や特徴を付箋に書き出し、班で分類する。(15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○付箋に書き出す。 <ul style="list-style-type: none"> ・公民館だよりの発行 ・バリアフリー ・高齢者の利用者が多い ・元気な高齢者が多い ・孤食への取組 ・歴史や教育に力を入れている ・城下町の町並み ・伝統を継承 ・藝を継承 ・地域の人で育てるコスモス ・避難所 ・サークルで交流 ○班で付箋を分類する。 <p>3. 複数の公民館の取組から、相違点を見つける。(10分)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○2の活動で作成した分類や今までの活動をまとめた資料を使いながら、班で複数の公民館の相違点を話し合う。 <p><相違点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・藝を継承(古くから伝わることを地域の子どもに伝えていきたい。) ・城下町の町並み(古き良き城下町を地域の子どもや観光客に伝えたい。) ・サークルの活動の内容が違う(地域の特色を生かすため。) ・連携先がちがう(民生委員や警察、小学校や保育園など地域の現状によって様々な所とつながっている。) <p>4. 学級全体で共有し、地域のよさや課題を考える。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者に対する取組が多いのは、高齢者が多いから。 ・みんなが集まる場所は、地域のつながりがあるよさだと思う。 ・藝の継承は、その地域の伝統を残すための大事な取組であ 	<ul style="list-style-type: none"> ・班で、ホワイトボードかタブレットを選択できるようにする。 ・担当公民館が違う人が集まるように班を編成する。 ・まずは個人で公民館の取組や特徴を付箋に簡潔に書き、その後、班で話し合うときに補足説明しながら分類するように伝える。 ・班で分類する場面では、付箋の説明だけでなく、公民館訪問で見たり、聞いたりしたことも踏まえたり、今までの活動をまとめたファイルやタブレットにある資料なども使ったりして説明してもよいことを伝える。 ・分類したカテゴリに見出しを付けるように指示する。 ・分類する活動を通して、公民館の取組や特徴の共通点を見つけることができるようにする。 ・班で、ホワイトボードに書くように指示する。 ・「その取組はどんな目的や思いで行われているのか」などと問いかけ、相違点にあがった項目がその公民館の特徴や地域にニーズなどに着目して話し合うことができるように促す。 ・時間がある班は、ホワイトボードの右側に共通点とその理由をあげるように促す。 ・取組の具体的な内容やその目的などを生徒に発表するように促すことで、その地域の現状やニーズに合わせて公民館の取組が行われていることを学級全体で共有する。 ・複数の公民館の取組の共通点も取り上げ、地域のよさ

<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ対策などがしっかりしているのは、安心な場所になって人が集いやすくなるから。 <p>5. 複数の公民館の取組や特徴を比較する活動を通して考えた「住みたいまち」について説明する。(5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の方が安心して暮らせるまち(これから高齢者の数は増えていくし、高齢者の方は体が不自由な方も多いので、バリアフリーなどが備わっているまちがよいと考えたから。) ・みんなが集い、笑顔があふれるまち(自分の趣味や生きがいなどを地域の仲間と共有できる場所があると楽しみが増え、長生きができそう。そんな姿を公民館訪問を通して見たから。) ・安心・安全なまち(どこの公民館もコロナ対策がしっかりしてあった。コロナ対策やバリアフリーなどの対策がしっかりしてあると、子どもから高齢者まですべての人が安心するから。) <p>6. 本時の振り返りをする。(5分)</p>	<p>や課題に着目することができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6つの公民館が地域の事情に合わせて様々な人にととの「住みたいまち」をつくろうと活動が行われていることを確認する。 ・「〇〇なまち」という形で書くように指示する。また、その理由も書くように伝える。 ・書くことに困っている生徒には、複数の公民館の取組の共通点に注目するように伝える。また、「公民館の職員や利用者の方が『住みたい』と思えるまちはどんなまちなのか」と問いかけ、一緒に考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">評価の観点(思考・判断・表現)</p> <p>複数の公民館の取組や特徴を比較する活動を通して考えた「住みたいまち」について説明している。 【ワークシート、ふりかえり】</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ふりかえりは、他の公民館と比較したことによって分かったこと、もっと調べてみたいと思ったことなどの視点で書くように指示する。
---	--

3. 概ね満足できると判断される状況

複数の公民館の取組や特徴を比較する活動を通して考えた「住みたいまち」とその理由を記述している。

(活動の振り返りの記述)

- ・他の公民館の取組を知って、共通点が多いと思いました。特に高齢者の方へスポットをあてた取組が多かったので、少子高齢化が島根の課題だと思いました。だから、私は高齢者が住みやすいまちを目指すことが大切だと思いました。9年生になったときに高齢者の方に関わる取組を公民館の方と一緒にやってみたいです。
- ・今日は他の公民館の取組を知って、分類することができました。自分の考えた「住みたいまち」は安心・安全に暮らせるまちです。どこの公民館も災害対策がしっかりしてあったので、その地域は住みやすいまちだと思いました。松江市内にある他の公民館の取組についても知りたいと思いました。

【Appendix D 指導案「住みたいまちについて考える④」】(第39時/全40時：第五次)

1. 育成を目指す資質・能力

- ・学んだことを振り返り、よりよい社会の在り方を求め、新たな問いや課題を見いだそうとしている。
(主体的に学習に取り組む態度)

2. 本時の内容

学習活動	教師の支援
<p>1. 発表会のふりかえりを紹介する。(5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○6年生、7年生のふりかえりを紹介する。 ○8年生の発表会についての、7年生のふりかえりを紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・6年生のふりかえりを紹介することで発表面、7年生のふりかえりを紹介することで公民館活動について振り返ることができるようにする。 ・8年生の発表会のふりかえりも紹介することで、8年生の発表を聞いて考えた「住みたいまち」にも触れる。
<p>2. 「住みたいまち」にしていくために、公民館の取組で見つけた良さと課題を考える。(5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・公民館での活動を振り返るために、ファイルや chromebook を見てもよいことを伝える。 ・自分が訪問した公民館の特徴だけでなく、発表会などを聞

<p>【良さ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の方を対象にした取組が多い。 ・地域のよさを伝える取組がある。 ・避難所として役割を果たすことができる。 ・みんなが集う場所になっている。 ・子ども対象のイベントもある。 ・伝統を継承している。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者の方に高齢者が多い。 ・若者の利用が少ない。 ・中高生が利用しにくい。 <p>3. 良さと課題を共有する。(15分) ○班ごとに良さと課題をまとめる。</p> <p>4. 住みたいまちのマッピングをする。(5分)</p> <p>5. 現段階で考えられる松江(島根)の強みと課題をかく。(5分)</p> <p>6. 振り返りをする。(5分)</p> <p>【時間が余れば・・・】</p> <p>7. 新聞コンクールの投票をする。(10分)</p>	<p>いた他の公民館の取組から考えても良いことを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まなボードに書き出すように指示する。 ・まなボードを黒板に貼り、学級全体で共有する。 ・8年生の代表発表であったように、「課題と思っていたことが良さだった」という例を挙げ、見方を変えることの大切さを伝える。 ・以下の7年生のふりかえりを紹介し、8年生での職場訪問を通して「住みたいまち」を探る活動につなげる。 ・今回は館長さん、その利用者の高齢者の方へ話す機会やインタビューする機会が多くありました。でも今回調べられていない20～40代の人にとって、このまちへの意見や住みたいまちがどのようなものなのか気になりました。また、松江だけでなく、東京や大阪、京都などの都会に住んでおられる方の意見も聞きたいと思いました。 ・「公民館の活動の『良さ』を『強み』と捉え、『課題』を解決する方法を、来年は探っていきたいね」と声かけする。 ・時間があれば、以前に行った住みたいまちのマッピングと比較する。 ・8年生のスタートで、この考えに書き足す活動からスタートすることを伝える。 ・数名指名し、学級全体で共有する。 ・次回は、1年間の活動のふりかえりをして、ファイル提出をすることを伝える。
--	--

3. 概ね満足できると判断される状況

- ・「住みたいまち」という概念の裏側には、自分たちの身の回りの大人や組織が「誰か」のために社会を維持するために活動していることが前提になることを理解している。
- ・自分もその社会の一員であることに意識が向いている。
(8年生の未来創造科では「職場訪問によるインタビュー活動」を行うため。)